

ひまわりからの メッセージ

57号

2016.1.18

西濃圏域
発達障がい支援センター
ひまわり

発行人：中野たみ子

一言の重み



何年も前のことでしたが、中国から日本への帰国便の待合室で有名な作詞家と出会ったことがありました。もちろん、ことは交わすこともなく、飛行機は大幅に遅れて、成田に到着しました。翌日、外すことのできない仕事のあった私は、最終の新幹線に乗りねばならず主人を残し、大急ぎで走って、その作詞家夫妻を追い抜いたのです。すると、その時、「いやだね、日本人はこれだから……、そんなに急がなくてもいいのに……」ということが聞かれました。私も時間にゆとりがあれば、走ることもなかったでしょうが、相手のことを全く知らないまま浴びせ

られたひとことは深く心に刺さったのでした。そして、Aさんの歌う名曲を聞くたびに、こんな素晴らしい詞を書くんが……と、何年たっても当時のことを思い出してしまふのです。

ところが先日のこと。園内の食事会で、誰かが座布団を用意して下さっていました。コルセットをしていて、床に座るのが大変な私のための心配りでした。けれども、その座布団を見た瞬間、私の口から自分でも思いがけず「無理……」ということが口をついて出たのです。音識したことはではなかったのですが、その一言をつぶやいた自分自身におどろき、傷つき、よかれと思っただけで下さった好意に対して発したひとことに己が未熟さを思い知ったのでした。そして、自分では気がかずに、色々な場面で人を傷つけることは口に出していることもあるのではないかと思いたのです。お母さんたちにも、子どもたちにも……。

人と人との間で、私たちは様々なことは紡いでいきますが、一言一言の重みを忘れずにいたいと思えました。今年もよろしくお願ひします。

「暗黙のルール」の難しさ？？

人が生きていく時、様々な場で暗黙のルールは使われます。常識と言われるものであったり、誰もが当然知っているつもりですが、そういうルールは、発達障がいの子どもたちにとって、とっても難しいことのようにです。今まで見聞きした人の中にもいろいろな方がいらっしゃる。私達もその困り感を知り、深く反省させられました。子どもたちとクッキーを焼いていて、「ちまっとAさん、見て下さいね」と席をはなれて戻ってみると、クッキーはみごとに黒く焦っていました。「見てね」としか言わなかったのが悪かったです。「こけそうになつたう出してね」の一言が足りなかったのです。「昼食は〇の時からです」と、一日のスケジュールも伝えておいたところ、他の人達はまだ皆仕事をしているのに、自分だけさっさとお弁当をひろげ始めたBさんには、周りの人達の行動を観察して、皆の行動

をまねするようにと伝えるべきでした。

「外の落ち葉をはいて下さいね」と頼んだのに、いっつうに落ち葉が集まらな、いつまでもゴミ袋が空のままだったCさんには、「はく」という行為の次に「集めてゴミ袋に入れる」ということを知らせておくべきだったことがわかりました。

「机をふいて下さい」と言われて、机の中央だけをふいて「終わりました」と報告してきたDさん。「机をふく」ということは、隅から隅までふくこと、そして、隅から隅までということは、具体的にどういうことなのか教える必要があったのです。

そんなふうに色々と考えてみると、私たちの生活の中に何と多くの暗黙のルールがあることでしょう。ことは字義通りに受け取って、そのことばのうりにかくされたことばが分からない、気づかないということを特性にもつ子どもたちにとって、将来の生き難さにつながって行くのだと思います。

子どもたち同士のトラブルにしても、ことばの取りちがいや、思いがちということも多いように思います。

ソーシャルスキルトレーニングにしても、トレーニングの場面で学んだことを、日常生活の中にかくに汎化させていくのか、その難しさがあるように思います。

暗黙のルールを身につけさせるための方法として、ソックス法、ソルヴ法、ソーシャルナラティブ、ソーシャルストーリーといった方法が考案されていますが、その中には、マンガ化、コミック会話といったものがあります。ことばだけでは、なかなか理解しにくいことを、マンガに見られるような視覚的シンボルを使って暗黙のルールや周囲の環境を理解する能力を高めていくものです。

グレイの考案したコミック会話は、作成するステップとして次のような提案をしています。

- ① 世間話をする
- ② ある場面につけて絵を描く
- ③ 現在の視点
- ④ 順序やしぐみを与える
- ⑤ マンガを要約する
- ⑥ 新たな解決策を明らかにする

コミック会話は、別に芸術性の高い絵を必要としません。棒人間でかまわないのです。そして、その絵に吹き出しをつけたりして、マンガ化していきます。

①の世間話は、絵を描きながら、先生と子どもとの間に良好な関係を育んで、子どもからの信頼を得るようになります。天気のことや、週末の遊びのことなど何でも良いのです。

②は、グレイは、子どもが描くことを勧めています。他の研究者は、教師が子どもが言う通りに描くことで、情報をもりうまく伝えられると考えています。

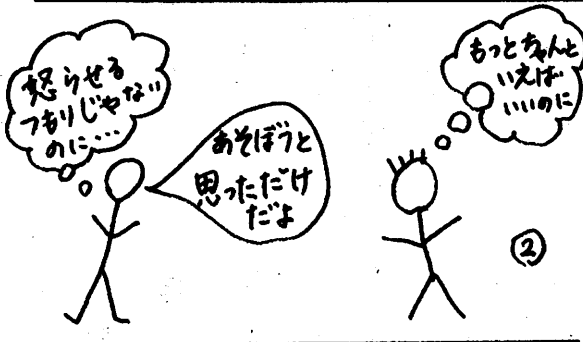
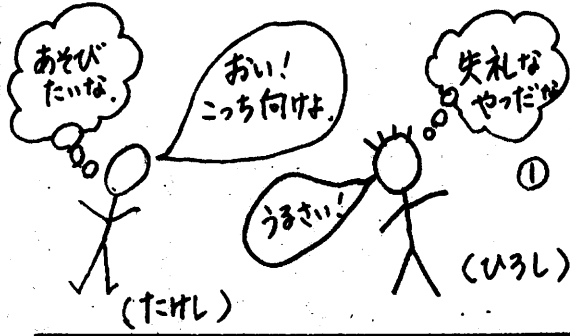
「あなたはどこにいるの？」
 「ほかには誰がいるの？」
 「あなたは何をしていたの？」
 「ほかの人は何をしていたの？」
 詳しい情報が伝えられるように、教師は色々と質問しながら子どもを誘導していきます。

コミック会話のシンボルは、次のようなものです。



コミック会話の目的は、コミュニケーションを明確にするにすぎず、かいているうちに、ことばと絵が密集したり散乱したりして、分かりにくくなってしまふことがあります。

ものごとを整理して考えることが苦手な子どもには子どもが絵を書きこめるコマ枠を作るといいでしょう。起ったことの順番をまちがえて描いても、コマに着手をふれば簡単に並べかえることもできます。こうすることで出来事の流れが明確になります。



どう言えばよかったか?

③

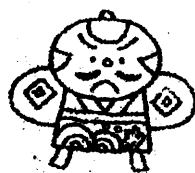
例えば、上段のような場面を描いてみました。描いた絵にそれぞれの思いを書き入れて、どうしたらいいのかわからない良かったのが、解決策を考えたいくのです。

コミック会話を重ねていくと、子どもたち各々に個人のシンボルとしての絵を用いるようになってくるでしょう。絵を描きながら自分の思いを記入し、相手の思いも推し測って、解決策を見出し出ていくという作業を通して、「うまくやれた」という経験が積み重なっていく。将来的には、自分で計画をたてて実行することもできていくと思われれます。

そして、グレイは、ここに感情の色を表すことを提案しています。例えば緑は、よい考え、うれしい、親切を、青は、悲しい、おちつかないを、赤は悪い考え、いじめ、怒りなどを表すとしています。単なる会話だけでなく、感情を色で表すことでより深く、その時の気持ちが表示できるのでしょう。

家庭で、親子でやってみるのもお勧めです。

合理的配慮って……？



保護者の意向と

本人の発達のニーズ

週日、心理士の研修会に出かけました。講師は、東京の特別支援学校の教員の方でした。

その学校の高弁部では、知的に遅れのない発達障がいの子と、ダウン症など知的にゆくりな発達の生徒さんが一緒に学んでいるそうです。発達障がいの生徒さんには、特性に応じて場の構造化がなされていたり、先の見通しがたてやすいように工夫がしてありました。

一般的には、発達障がいの生徒と知的障がいの生徒が一緒にいて、うまくいくはずがないと思われがちですが、そうではありませんでした。特性を知って合理的配慮をすることとは、その生徒の居場所を確保

することになり、心の安定をもたうすことになるのでしよう。知的障がいのお子さんに親切に教えている自閉症児の姿もあり、こうして互いに学び合っていくのだと思いました。

四月に制定される障害者差別解消法。私たちに求められる合理的配慮とは？と考えます。

先日行われた児童発達支援管理責任者（略して児発管）の研修の折に、放課後デイサービスの施設の方達に、「子どもの発達という視点で、子育て支援を」と話したところ、「私たちは、そうしたいのですが、保護者の方の中には、ただ預ってくれば良いという方も多くて……」ということばが返ってきました。

教育支援委員会の就学先決定も、保護者の同意のもとに行われます。

学校や専門機関における合理的配慮と、家庭における配慮は、本来は車の両輪であるべきですが、今後はどうなっていくのでしょうか。今の時代どうあっても

こは、お父さんやお母さんが、我が子をしっかりと受け止めて、今、我が子に必要なことは何かを見極めていく目をもっていただく必要がありそうです。

発達障がいということばは、世の中に広まりました。インターネットで調べて、「うちの子どもそうではないだろうか……」というご相談もふえました。しかし、本当に正しく発達障がいと理解されているかという点、決してそうではありません。

「勉強ができるから……」という見方も、まだ多く、子どもたちの本当の困り感や将来の生き難さを分かっていただけない場合もあります。いえ、保護者の方自身が、わかるところまでいない場合もあるのです。

子どもは何に困っているんだろうか？
子どもはどんなことに困っているのだろうか？

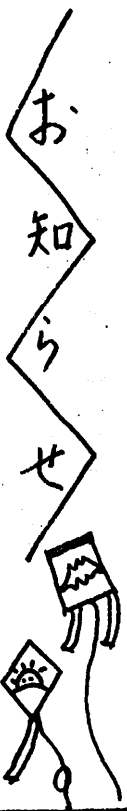
この問いに答えるには、子どもの一面だけ（例えば勉強のこと、例えば体のきこちなさ、あるいは言語のことなど）見てはだめだろうと思います。子どもを全体像でとらえることが、私たちにも保護者の方々に

求められているのではないだろうか。

人間の体も思考もことばも行動も脳の働きと無関係ではありません。脳の中で作られる神経のネットワークは、年齢が低ければ低いほど可塑性が高いといわれています。昔は、発達障は幼少から児童期までと考えられていましたが、私のような年齢になっても遅くはありません。人間は生涯発達しつづけるものだと考えていきたいものです。

子どもたちの発達のニーズ（教育現場では教育的ニーズと呼ばれています）を、とらえて子育てをしていきます。

そして今の時代、様々な機関と連携していくことが、どうしても欠かせませんね！



二月親の会は、8日も予定しています。この時期、会議等が入ってきます。変更の場合、メールで配信させていただきます。